

茶室覚書

藤村庸軒 京都 金戒光明寺 西翁院
1685 三畳 道安囲 よどみのせき

澱看席

外観：西向き、柿葺片流れ屋根 前面切妻造りのさしかけ屋根
この土間庇の四坪が内露地で、手水鉢が設置される。
床：土天井の室床。墨蹟窓をあける。2枚半の床の地板。
落掛けの小壁が高すぎるので、華鬘けまん形の板額を掲げる
屋根：仕切壁の重苦しさを緩和するため、鴨居の高さで切り、
上部をひと続きの総化粧根裏とした空間作り。
手前座：道安囲いで、点前座の風炉先窓を付け、その入隅に
一重の仕付け棚 窓も2カ所開けて明るい

- ・千宗且四天王、藤村庸軒晩年の作 明治になってからの命名
- ・炉の角に中柱を立て、5.1尺の高さに通された無目敷居（付敷居）でつくられた間仕切り壁に火灯口をあけた道安囲い
- ・道安囲いは、客座に対して点前座を次の間的に位置づける構えで、亭主の謙虚な姿勢を示す侘びた思想
- ・勝手付の横長の下地窓から淀川あたりまで望めたので淀見（澱看）の窓と言われる。
風炉先嵯峨の景色が見えたので嵯峨見窓と呼ばれる。

